

海上交易拠点としての要塞オルムズ ―― ペルシャ湾の要

広島工業大学 正会員 ○今川 朱美
広島工業大学 正会員 石井 義裕

1. ペルシャ湾の要「オルムズ」

Hormoz(オルムズ)は、ペルシャ湾とオマーン湾の海峡にある40km²ほどの小さな島である。海上交易の要衝に位置している上に、イランとムサンダム半島により両湾の境界が狭まった地形となっており、現在もこの海峡の閉鎖は、原油価格の変動による経済危機をも引き起こしかねない。

港湾都市は紀元前より本土の Minab(ミナブ)川河口付近に Harmozia(ホルモジア)という名で存在していた。12 世紀にアラビア半島南部より移住してきたアラブ人によってインド洋貿易の拠点となった。蒙古族の侵略を受けるようになったため避けようと、1301 年に Jerum(ジェルーム)島に移り、港町を含む島全域が Hormuz(ホルムズ)と呼ばれるようになる。西洋諸国の東方進出が盛になると、ポルトガルは武力で持って要塞の建設(商館)の建設を望んだ。国王は 1508 年に一旦許可したものの、武装しポルトガルに反撃に出た。しかし、1515 年にはアルブケルケによって完全に占領され、ポルトガル人によって支配されることとなり、国王は幽閉された。その後 1 世紀ほどがホルムズの最盛期である。1622 年サファヴィ朝の Shah Abbas(シャー・アッバース)がイギリスの力を借り、ポルトガルは退去することとなった後、港町は本土に建設され、島は退廃していったのである。



図1 オルムズとその港機能の建設

最盛期であった 15 世紀に東方諸国との海上貿易を司ったオルムズに残る要塞「バンダルコッタ」は、すでに

廃墟となり、風化・風食されている。現地の文化財保存局は、一部修復を試みているが、確かな調査に基づくものではなく、遺跡のたどった道をゆがめられている感がある。本論は、1999 年と 2000 年に行った調査をもとに、その要塞の姿を記録しようとするものである。なお、オルムズ最盛期であった当時の文献には、Hormoz ではなく、Ormоз と記載されているため、本論ではオルムズと言う。

2. バンダルコッタ「港の要塞」

オルムズ要塞の姿が記載されている最古のものは、ポルトガル人の Tomé Pires の『紅海からシナ国までの東洋の記述(文献 1)』である。オルムズの記載がある第 1 部は、著者がインド滞在中(1511~1512 年)の見聞に基づいて書かれたとされており、挿絵が添えられている(図3)。

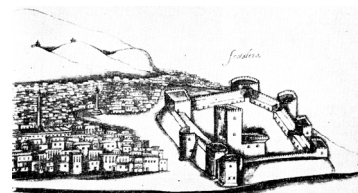


図3 オルムズ
(Correa:文献1, p69)



図4 ormvs 1573
(F.Hogenberg:文献5, p213)

地理図集としては世界で 2 冊目の 1572 年に発行された『Civitates orbis terrarum(文献 6)』にもオルムズは描かれており、印刷の後、彩色が施されている。大英図書館には着彩されていない同じ図(図4)が収められている。1573 年発行の『The Atrun Hispaniæ Urbes(文献 5)』に掲載されているものであり、先の文献 6 を再編したものであると思われる。14 世紀のポルトガルやオランダの航海図にもオルムズの存在が記されているが、要塞の姿を見せるものはない。

3. 貯水槽「シスターン」

世界中の価値ある物資が集積し取引がなされていたオルムズであるが、塩の岩石の不毛の島であり、真水も

ない。そのため大陸から供給をあおいでいたが、ポルトガル要塞では1年半分の水が貯留できるようにシスターンが設けられていた(図5:A-1)。

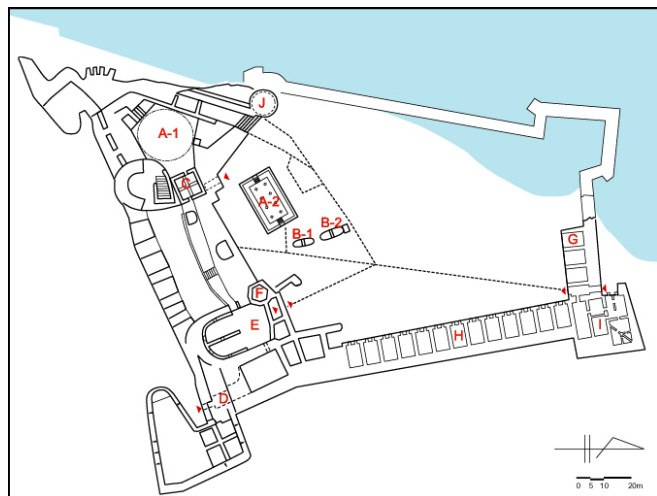


図5 要塞測量図

水が貴重であったゆえに、入口(D)から遠い位置に計画されている。シスターンの東には長官家族の居住塔(C)があり、そこには小さなキッチンもあった。オルムズの長官は妻帯が許されており、家族での空間があることから、この地の重要さとこの地を治める長官の地位が高かったことが裏付けられる。さらに、長官家族の居住塔と長官のオフィス(J)がいずれもシスターンに近かったことから、要塞では水の管理の必要性がうかがえる。A-2は、現地の文化財保存局によると教会とされている。要塞の中庭に砂が堆積し、教会部分が地下空間になったため後世になってシスターンとして利用したとある。しかし、柱のGL近くまで水による侵食跡が見られること、周囲にキャットウォークがあることから、当初よりシスターンであったのではないかと考える。



図6 教会とされているシスターン (A-2)

その理由は ①漆喰を作るための堅穴(B-1,2)が現在のGLより当初のまま残っている。②海からの攻撃に備える要塞は、攻め入られたときの非難ルートも計画さ

れているはずである。中庭よりEに逃げ込むとして、そのEこそが教会であったのではないか。Eの壁にはマリア像などを飾ったであろうニッチがある。しかし、この壁はあとから建設された可能性も否定できない。が、Eに接する六角形の空間が礼拝堂だったとすれば、内壁を後に建設する以前より教会(コミュニティホール)であったと考えられる。③墓地は要塞外部にあり教会も併設されていたのではないか。であれば要塞内部に独立した教会建築が必要であったとは考えにくい。以上によりA-2は、ヴォールトと長堂式の厳格な空間を持つために教会と称されたのではないか。さらに、要塞にあったとされる教会は珊瑚でできていたとの言い伝えがあるが、A-2は塩分を含む赤い岩石でできており、Eの珊瑚を漆喰で積み上げた内壁となっている。

4. 結語

今回は、シスターンのある要塞の存在を記すに留まった。今後さらなる考察をまとめるものとする。また、将来、わが国が地球環境に配慮した土木を目指すのであれば、雨水貯留システムは必要であろう。700年も昔に、貯水槽が暮らしを支えていたことに感嘆する。

謝辞:この調査は、文部科学省 平成 9-10 年度 科学研究費国際学術研究(研究代表者:布野修司)で行った。このようなチャンスを与えてくださった布野修司先生(滋賀県立大教授)と、調査指導および現地にて考察を与えてくださった応地利明先生(京都大学名誉教授)に深く感謝いたします。

参考文献

- 1) トメ・ピレス著、生田滋他訳：『東方諸国記 (Suma Oriental que trata do Maar Roxo ate os Chins, ~1515)』大航海時代叢書 5, pp. 69-73, 岩波書店, 1966.
- 2) リンズホーテン著、岩生成一・渋沢元則訳：『東方案内記 (1596)』大航海時代叢書 8, pp. 116-129, 岩波書店, 1968.
- 2) 家島彦一：『海が創る文明』朝日新聞社, 1993
- 3) Günther Schweizer : BandarAbbās und Hormoz Schicksal und Zukunfteiner iranischen Hafenstadt am Persischen Golf, pp.7-18, 1972
- 4) マルコ・ポーロ著、青木一夫訳：『東方見聞録(1553)』校倉書房, 1960
- 5) Ad Orientem & Auftrum 『The Atrun Hispaniæ&Urbes』 Civitatescelebriores , p213 , 1573
- 6) Braun and Hogenberg 『Civitates orbis terrarium』 I -54, 1572,
- 7) João Campos : The Intercontinental Urban Experience of Portugal since the Beginning of Modern times, Rua de Santa Luzua, 1997